

9月のことだが、教育実習に3名の大学生が来てくれた。若い人を見ていると、いつも思うことがある。伸びるタイプとそうでないタイプがあるということである。まだ学生で教育実習なのだから、自信がないのが当たり前だろう。ところが、どうも自信があるのか、先生方のアドバイスを聞き入れようとしている場面を見かけることがある。様子を見ていると、人に言われたくないタイプであることがわかる。こういった人がいることは以前から認識していた。損だと思う。

伸びていくタイプというのは、まず謙虚である。だから、人の話を聞き、考える。そして、判断する。中には、スポンジのように吸収していく人がいる。一方、伸びないタイプは、自信ではなく過信である。謙虚さが足りない。それが仕草や態度、言葉の端々に出てしまう。自分の力を測ることができないのかもしれない。自分の現在地がわからなければ、どのくらい努力をすればいいのか見通しを立てることができない。身の程知らずということであろう。

人に言われたくないのは誰にでもあることに違いない。だが、鎧をまとってしまっては、せっかくの出会いが、チャンスとはならなくなってしまう。こういった人は、うまくいかなかつたことを人のせいにする傾向がある。我が身を省みることをしない。原因を自分ではなく人に求める。教育実習であれば、子どもである。このまま先生となり、現場に出てしまえば、不幸なことが起きる。自己の客観視は重要である。

自分の教育実習を振り返ってみる。小学校で6週間の実習だった。1日だけ、中学校の授業を見にいった。実習日誌に、授業に活気がないと感じたようなことを書いた。授業をしてくださった先生が、丁寧に赤ペンでコメントを返してくださった。担当の大学教授に呼ばれた。私が書いた内容は、相手に失礼だというような指導を受けた。それも穏やかに言わされたので、余計にこたえた。自分は、この教授にも迷惑をかけたのだなど自分の生意気さ、謙虚のなさを反省した。身の程知らずにも程がある。もう何十年も経った今でも覚えている。よほど骨身にしみたのだろう。

こんな学生が、教員となり現場に出てしまった。数年が経ち、小学校から中学校に異動し、国語の授業と格闘していた。あるとき、ディベートの授業をやっていたら、新聞社の取材があった。自分の授業が新聞の記事になった。すると、今度はNHKが取材にきた。自分の授業がテレビで放映された。

次の日の夕方だった。自宅に電話があった。懐かしい声だった。すぐにわかった。散々迷惑をかけた大学の教授だった。私のディベートの授業が放送されるのを見てくださったらしい。それで、わざわざ電話をくださったのである。大学を卒業して以来だった。うれしかった。ありがたかった。恩返しができたなどとは思ってはいない。気の利かない私は、大学時代のお礼も言えずに電話を切ってしまった。出来の悪い学生だった私のことを覚えていてくださったのである。期待に応えようと、これからもがんばっていこうと心に誓ったのは確かである。

若者には、ぜひ伸びる人になってほしい。人は変われる。チャンスは誰にでも平等にある。それを生かせるかどうかである。